

第二節 如来禅と祖师禅

一、問題の所在

禅宗という言葉に盛り込まれた概念は時処位によって異なる。例えば、神会は『菩提達摩南宗定是非論』において、

梁朝のインドからの渡来僧である菩提達摩は南天竺国の第三王子であった。若くして出家し、智恵ははなはだ秀れていた。諸三昧を学び如来禅を獲得した。この法の命ずるままに遠く海を涉り、梁の武帝の所に来られたのである。……(中略)……

達摩は遂に仏の知見を披瀝して密契を与え、伝え持つて来た一領の袈裟を、法の証しとするために恵可に授けた。恵可は僧璨に伝え、璨は道信に伝え、道信は弘忍に伝え、弘忍は恵能に伝えて、六代にわたって相承し連綿として絶えなかつた。(1)

と、達摩が「如来禅」を伝えたことをいう。この「如来禅」という術語は『楞伽経』に淵源をもち、伝統的には北宗の維持する禅法と考えられる。しかし、『歴代法宝記』に、

東京荷沢寺神会和上は毎月壇場を作り、人の為に説法して、清浄禅を破して如来禅をお立てになつた。知見を立て言説を立ててそれを戒定恵となさり、言説を否定しないで云われた、「いま正に説いているのが即ち戒であり、いま正に説いているのが即ち定であり、いま正に説いているのが即ち慧である」と。無念の法をお説きになつて見性を立てられたのである。(3)

とある如く、北宗の立場を恐らく「弘塵看浄」などの教理から「清浄禅」として総括し、その修禅の系譜を否定して「如来禅」を南宗に帰せしめたのであろう。

従つてこの「如来禅」の立場は南宗の正統であるはずである。にも拘わらず、例えば『馬祖語録』に、

本来あるものが今ある。だから修道や坐禅は必要が無い。修行もせず坐禅もしない。これが如来清浄禅なのである。(4)
と自らの立場を「如来清浄禅」と称している。同じように宗密も、『禅源諸詮集都序』に、

もし自心は本来清浄で元もと煩惱も無く、完全な智性は本来自らが具足して、此の心が即ち仏で畢竟にも異ならぬことを頓悟すれば、これによって修行すれば、それが最上乘禪であり、また如来清浄禪と名づける。また一行三昧と名づけ、また真如三昧の根本と名づける。もしよく念念修習すれば、自然に漸々に百千三昧を得ることが出来る。達摩門下に展転と相伝したのは、この禪なのである。(6)

という。ここに明らかなように宗密は最上乘禪を「如来清浄禪」と規定し、「一行三昧」と等置している点も注意を要する。神会にも一行三昧は見られるが「定是非論 p.297」、ここにおける表現はむしろ北宗の範疇なのである。これらの事例によって、馬祖や宗密はこれまでの禪宗の思想的な文脈を無視し、必ずしもその厳密な概念規定を受けていない様子が窺える。

ところで、『祖堂集』卷一九、香巖智閑章には香巖の大悟を疑う仰山に投機の偈を呈する話がある。

香巖はそこで偈を造つて応えた、「去年は未だ是れ貧ならず。今年は始めて是れ貧なり。去年は錐を卓てるの地無し。今年も亦た無し」と。仰山は言った、そなたは如来禪の有るのを御存知だが祖師禪の有るのを御存知ないらしい。(7)

ここでは明らかに「如来禪」は「祖師禪」によって克服されている「柳田祖師禪 pp.82～87」。しかしこの祖師禪という概念は仰山の造語らしく、用例も少ない(8)。従つて神会や馬祖の唱えた如来禪が必ずしも低い評価しか持たなくなつたとは言い難いであろう。また史的な視点からすれば北宗を清浄禪と規定し得るかどうかについても問題が残るであろう。

ところで最近、敦煌発見のチベット文禪宗文献の中から、如来禪に関する記述がいくつか見出された。それらの資料を漢文資料と対応させつつ、従来必ずしも明確でなかつた如来禪思想の展開の様相を探つてみたいと思う。

二、如来禪について

元来、如来禪という術語は、大乘經典一般に広く見受けられ、例えば『菩薩藏經』に、

云何が名づけて如来禪定と為す。解脱等持等至、染浄の起う所の智力、謂く仏如来は自に於いて他に於いて、所有の禪定解脱等

持等至染淨等の法を、悉く如実に知れり(8)。

と、あるいは『大集經』に、

諸仁者よ、彼に於いて何者か是れ禪清淨平等なるや。禪を有する声聞緣覚如来は共なり。禪を有する緣覚如来は声聞と共不共なり。如来禪を有さば声聞緣覚と不共なり。如来禪を有さば声聞緣覚一切衆生と共なり(9)。

等といわれ(10)、諸種の禪法の一つとして、經典によつてその位置づけも異なるが総じてさほど卓越した意義は附されてはいない。初期禪宗史において、これが重要な概念となつたのは、あくまで『楞伽經』の中に四種禪の最高位に位置するものとして、

云何が如来禪なりや。謂く如来地に入り、自覺聖智相三種樂住を行じ、衆生不思議事を成弁す。是れを名づけて如来禪となす(11)。
 というのに基く。神会の如来禪に関する所説は『語録』の中に、

相応義とは無念を見る者を謂い、自性を了する者を謂い、无所得を謂う。無所得を以つて即ち如来禪なり。維摩詰云く、如し自ら身の実相なるを觀じるならば、觀仏も亦た然り。我れ如来を觀るに、前際は来たらず、後際は去らず、今は則ち無住なり。無住を以ての故に、即ち如来禪なり(12)。

とあり、また、

和上言く、有無双つながら遣り、中道も亦た亡ずれば、是れ無念なり。無念は即ち是れ一念なり。一念は即ち是れ一切智なり。一切智は即ち是れ甚深般若波羅蜜なり。甚深般若波羅蜜は即ち是れ如来禪なり。是の故に經云く、善男子よ、何等をか如来を觀ずとするや、維摩詰云く、如し自ら身の実相を觀ずれば、觀仏も亦た然り。然るに我れ如来を觀するに、前際は来たらず、後際は去らず、今既に無住なり。無住なるを以ての故に、即ち如来禪なり。如来禪は、即ち第一義空なり。若し菩薩摩訶薩是の如くに思惟觀察せば、上下昇進して、自覺聖智なり。(13)

とあるのもその範疇に属する。ただし神会のそれは「樂住」から「無住」への展開に見る如く、單なる『楞伽經』の祖述ではなく、批判的な継承として位置づけられる「柳田初期 p217」。

神会には『金剛経』を立てて『楞伽経』をことさらに禅宗の伝統から消去する意図も一方で明瞭であるが「神会語録 p.180」そのこと自体、却って『楞伽経』の影響下にあることを証しているといえるのである⁽¹⁴⁾。

以上の他に、神会の所説には東山法門や北宗と深く関る点が見出されており「田中敦煌 p.461ff.」北宗に対しても、その反定立という単純な図式だけではなく却ってその止揚を内包する発展段階の一つとして位置づける必要がある。そしてこのことから如来禅思想の淵源を、北宗あるいはそれ以前に求め得る可能性が出てくるのである。

三 北宗の如来禅

『金剛三昧経』は東山法門を権威づけるために作製されたとする従来の所説には再検討が迫られている「石井金剛 p.36」。しかし成立事情が何であれ、所与の『金剛三昧経』を東山法門が利用したことは間違いないところである⁽¹⁵⁾。そしてここにも如来禅に関する立言が見られるのである。即ち、

菩薩は彼の衆生をして、三を存し一を守りて如来禅に入らしむ。禅定を以つての故に、心は則ち喘する無し。大力菩薩言く、何をか存三守一入如来禅と謂うや。仏言く、存三とは、存三解脱なり。守一とは一心の如を守るなり。如来禅に入るとは理観心浄如たり、是の如き心地に入るを、即ち実際に入るとなす⁽¹⁶⁾。

というのがそれである。

ここで問題となるのは「存三守一入如来禅」とは何かということである。これらの語彙には前例がなく、『金剛三昧経』の語る所によれば、「存三」とは存三解脱のことであり、その三解脱とは、「三解脱者虚空解脱。金剛解脱。般若解脱。」^[T.9,370a]であるとされる。「守一」とは「守一心如」^[T.85,370a]と規定されるだけである。

これらを他の東山法門系の文献に徴するならば、『楞伽師資記』道信章に、

諸経の観法は備えるに多種有り。傳大師の説く所は、独り守一して移らざるを挙げ。先ず身を修めて審らかに観じ、身を以つ

て本と為す(17)。

といい、また弘忍の『修心要論』(最上乘論)には、

問うて曰く、何ぞ自心の本来清浄なるを知らん。答えて曰く、十地経云く、衆生の身中に金剛仏性有り。猶えば日輪の体明円満にして廣大無辺なるが如し。只だ五陰の黒雲の覆う所なるが為に、瓶内の灯光の照輝する能わざるが如く、譬えば世間の雲霧の八方に俱起して天下陰闇なるが如し。日は豈に爛なるに、也た何故に光無きや。光は元と不壞。只だ雲霧の覆う所なるが為に、一切衆生の清浄の心も亦た復た是の如し。只だ攀縁妄念煩惱諸見の黒雲の為に覆わる。但し能く凝然として守心せば、妄念生ぜず。涅槃の法は自然に顕現す。故に知る自心は本来清浄なりと(18)。

という。ここでは如来蔵思想によつて心を規定し、「了然守本真心」[378c]つまりその本来性を守れば如如のありようが自ら顕現すると説くのであるから、『金剛三昧経』の所説と同一である。即ち、東山法門の立宗根拠の一つである守心が如来禅と等置されている説相はその深い内的関連を示唆するといつてよいであろう。

東山法門には直接如来禅に言及する文献は見当たらない。しかし上のことをもつてすれば東山法門に如来禅思想のあつたことが充分予想されるのであるが、他にも『元享釈書』卷一六・力遊九には、北宗の華嚴普寂(651～739)の法を継ぎ、七三五年に來日した道璿(702～760)の次の語を伝える。

璿曰く、此の老比丘は、法の為に身を忘じ、心に貢高無し、又た貴とし可き也。乃ち告げて曰く、篇聚は身に被するのみなるも、我に心法有り曰く如来禅なり。昔、三蔵菩提達摩天竺より來りて、此の法を慧可に付す。僧璨、道信、弘忍、神秀、七伝して我が師普寂に至れり(19)。

という。これはいわゆる楞伽師と称される北宗系の人々もまた如来禅の伝授を主張していたことを明すものに他ならない。神会の『是非論』が七三四年頃の成立と考えられるからその先後関係は微妙であるが、荊溪湛然(711～782)の『止観輔行伝弘決』にも次の如くいう。

又た楞伽人云く、此の経は開權して法華義等と与なり。若し爾らば、何故に前後して諸文皆な二乗及び以つて外道を斥するや。故に第三に云く、一切愚夫禪は謂く二乗、此れ三藏を斥ける也。一は觀察禪、謂く自他を離れ無我に入り得る、亦た外道を離る。豈に通教に非ずや。三は真如禪、謂く念の不起なるを知る、豈に別教に非ずや。四は如来禪、謂く仏地に入る、豈に円教に非ずや。故に知る彼の教は猶を權乘を存し、大を以つて小を斥く、亦た前に明せる位義、意因に与る(20)。

神会が楞伽人と称される可能性はないといつて良く、湛然の交友關係から推してこれは北宗系の人々を指すと考えるべきである。これらの事実によつて第一資料は欠くけれども東山法門および北宗に如来禅思想の存した可能性が推測し得た。以下にこうした状況を踏まえて、チベット文禅宗文献の検討に移りたい。

四、チベット語如来禅関連資料

最初に関連資料を掲げることにする。

(A)道に一致せぬ無数の有情が、分別の疑いが尽きるのを知らず、要訳すれば、少くとも不信となり疑となる全てのことは、自らの分別によつてくらましつつ、かつて如来禅を修さなかつた結果である故に、その全てを思慮することなく、覺せしめるのである。如来禅を頓悟するにおいて、心が生じぬことのみによつても三界が克服されるようになるなら、あやまりない修習であることはあらためていうまでもなく、例えば獅子の子は眼が開いていなくても、他のけものがおそれるようになら、あやまりない修習であること中でかえつて、母も子も飛ぶのと同じであつて、この禅定の功德は世間に、比較すること易くない故に、力と義が大きいのである。

この禅定は大乘の法を信じつつ、一切法は唯信であること信託することが全てであり、誰しも修習し精進するべきである(21)。

(B)『禅定書』チソン・デツエン王の御歌の御手印の下にあらわれたもの。大瑜伽に入ること等についてお考えになつた義。

如来が禅定の無数の大門をお話になつた内で、『聖入楞伽経』に依れば、声聞と外道等の禅定は粗雑な相を有するものであり、信を行ずるものと、地に住する菩薩の禅定は有想と無想の順であり、如来禅は一際辺を超えるものであつて、禅定を行ずるにおい

て等しいけれど、世間と出世間と最上出世間というこの三種の区別も明らかに生ずるのである。そこにおいて、禪定の中で如来禪がよい、と語られている故に、今こゝで他の典拠の議論をする必要はないのであつて、『如来禪定論』即ち大瑜伽師が専ら修したものを一部分、簡単に記すのである。……(中略)……如来禪に入る仏子達も心・意・意識にはなく、最上智たる自覚聖智の安樂に住することによつて、因を成就せず、果を望まぬのはいうまでもなく、それ自ら法性の仏になる業であつて、それ故、声聞と外道等の他地に落ちないのである(22)。

(C) 如来禪は有相と無相の方便において、不観である分別する全てを克服した、自覚聖智のあとに従うものであつて、悪処の貪著と離れ、仏の摂受するものであつて、世間樹が生長すること、樂器の弦をつけること、の如くに漸次にではなく、鏡の面の像と日輪が世界に前後なくあらわれるが如く、貪著を頓に浄化するのであると、諸経にも語られているのであり、菩薩が無生法忍を得て、我見から最上の智慧の間において、得ることもなく得ないこともない故に般若波羅蜜に住して行ずるのである(23)。

(D) 如何なるものが信賴すべき如来禪であるかといえは、大瑜伽に入るものは最上の智慧によつて心を観じない。法身によつて蘊を観じない。心と蘊以外の実体を破してから、求めることも観じない。最上の智慧は智慧そのものも観じない。法身は法身そのものも観じないのであつて、一切辺を超えることは三世の法と同一ではないと了解するのである(24)。

(E) 一切識が無相の三昧になり、一切法は如々であるとする知恵が任運成就する時に、無明と識がない故に、知恵の業によつて何もなさないのであつて、無分別を任運成就する時に、専心して行ずることなくとも、無明と知恵なしに、頓に任運成就するのである。例えば樹がある間には火は燃えるけれども、樹が尽きれば火もたちまち尽きる如くである。かくの如くその聖智もなくなつてしまつたのち、もし、ありとあらゆるものがないのか、またそうでもなく他の何らかのものが有るかと言へば、分別に依るのではなく、それは最上の自覚聖智の眞実義に依るのであつて、有と無の義に依つて、増上せる戲論一切が寂滅する故に、如来禪は一切禪の中で秀れているのであるといわれている(25)。

五、考察

(A)は所謂摩訶衍遺文である[宗論3 p.6,7]。摩訶衍は北宗の系譜を継ぐことを表明しているからその中に如来禪説のあることには注目しなければならない。これに関連するのが(B)である。インド仏教の勝利を宣したとされるチソン・デツェン王の手元に如来禪への傾倒を示す文書があることは一見奇妙であるが、現在理解されているサムエの宗論の経過に従えば[山口年代 pp.6-12, p.23]、その時期は御前宗論直前の禪宗解禁時のものかとも思われる。あるいはまた後代に造られたチベットの史書が言うほど明快な結果には到らなかったことも充分考えられるのだが、いずれにしてもそしてそこにおける禪宗の中心人物は摩訶衍であるから、(A)と関連して摩訶衍に如来禪説のあったこと、そしてそれは早い時期に既に見られることが結論される。

その摩訶衍の如来禪説は例文に明らかな如く神会の発展的なそれよりは『楞伽經』の原型に近い。その淵源は『如来禪定論』の問題も含めて東山法門、あるいは北宗に求めるべきであろう。

(C)および(D)は連続する同一文献であるが、そこには經典の引用が一切なく、特定の經典の逐語訳でもなく漢文献としては異例に属する。細部の検討はなお不十分であるが、おおむね『楞伽經』を背後に予想するのが妥当であろう。ただし、般若波羅蜜と如来禪の結合は神会に見られる特徴であり、『楞伽經』には般若波羅蜜の出現例は少ない。しかしそれだけでは根拠としては乏しく、従ってここにおける如来禪説、ひいては本文獻そのものの成立根拠を確定することは現段階では困難である。

(E)も如来禪思想を説く何らかの典籍からの引用であることは明らかであるが対応文献は見出されていない。

以上、チベット文資料の概観を終る。最終的な結論はなお保留すべきであるが、一つの見通しとして、現存資料以外にも如来禪を説く所があったことは予想しなければならない。そこには『楞伽經』の祖述に近いものから『楞伽經』を批判的に克服する意図を含むものまでの中のあることが予測される。即ち、如来禪思想は『楞伽經』を継承してそれを祖述する東山法門・北宗系と、換骨奪胎して新たな展開を示す南宗神会系のものに分れることがチベット文資料によって窺えるのである。そしてこれらはすでに漢文資料に失われている前者即ち東山法門・北宗の如来禪思想とのつながりを示しているといえるのである。また先に引いた仰山の

言葉のみをもって祖師禪の如来禪に対する優越を結論づけるのも問題が残るといえるのである。

註

①『梁朝婆羅門僧学菩提達摩、是南天竺国国王第三子。少小出家、智惠甚深、於諸三昧、獲如来禪。遂乘斯法、遠涉波潮、至於梁武帝。……達摩遂開仏知見。以為密契、便伝一領袈裟、以為法信、授与恵可。恵可伝僧璨。璨伝道信。道信伝弘忍、弘忍伝恵能。六代相承、連綿不絶。』〔定是非論 p.160,261〕

②『楞伽經』には「有四种禪。云何為四。謂愚夫所行禪。觀察義禪。攀縁如禪。如来禪。」とし、それぞれの語義を説明する。如来禪については、「云何如来禪。謂入如来地行自覚聖智相三種樂住。成弁衆生不思議事。是名如来禪。』〔T.16,492a〕とする。

③『東京荷沢寺神会和上、毎月作壇場、為人説法、破清浄禪、立如来禪。立知見、立言説、為戒定恵、不破言説云、正説之時即是戒、正説之時即是定、正説之時即是恵、説無念法、立見性。』〔T.51,185b〕。〔柳田禪史 2 p.154,6〕

④『本有今有。不仮修道坐禪。不修不坐、即是如来清浄禪。』〔馬祖録 p.45〕。『景德伝灯録』馬祖章〔T.51440b〕。

⑤『若頓悟自心本来清浄、元無煩惱、無漏智性、本自具足、此心即仏、畢竟無異。依此而修者、是最上乘禪、亦名如来清浄禪。亦名一行三昧、亦名真如三昧根本。若能念念修習、自然漸得、百千三昧、達摩門下展転相伝者、是此禪也。』〔T.48,399b〕

⑥『香巖便造偈対曰。去年未是貧。今年始是貧。去年無卓錫之地。今年錫亦無。仰山云。師兄在知有如来禪。且不知有祖師禪。』〔祖堂集 p.355a〕。

『伝灯録』卷一 一 〔伝灯録 175a〕

⑦『宗門統要集』卷五・仰山章に、「吾有一機、瞬目示伊、若也不会、別喚沙弥」という偈を呈して祖師禪と認められたと言う。

⑧『云何名為如来禪定、解脱等持等至染浄所起智力、謂仏如来於自於他、所有禪定解脱等持等至染浄等法、悉如実知。』〔T.11,807a〕

⑨『諸仁者、於彼何者是禪清浄平等、有禪声聞縁覚如来共、有禪縁覚如来共不共声聞、有如来禪不共声聞縁覚、有如来禪共声聞縁覚一切衆生。』〔T.13,337b〕

⑩その他の用例は以下の如し。『阿差末菩薩經』卷三、「以濟衆若無有煩惱是如來禪、如來禪者了一切法、永不貪欲不想塵勞。〔T.13.594c〕。『法律三昧經』卷一、「如來禪者、無意無想無見無得、不熟曉了、那中繫意守淨無為、不曉權慧法意、以成得禪見空因緣解使得道、明過羅漢而不及、無十種力四無所畏及十八不共法、是為各仏所入禪」〔T.15.360a〕

⑪「云何如來禪、謂入如來地、行自覺聖智相三種樂住、成弁衆生不思議事、是名如來禪。〔T.16.494a〕。なお、『入楞伽經』十卷本には、「何者觀察如來禪、謂如來地、入內身聖相三寶三種樂行故、能成弁衆生所作不可思議。大慧、是名觀察如來禪。〔T.16.533a〕。『大乘入楞伽經』七卷本には、「云何諸如來禪、謂入仏地住自証聖智三種樂、為諸衆生作不思議事、是名諸如來禪。〔T.16.602a〕」がある。

⑫「相應義者、謂見無念者、謂了自性者、謂无所得。以無所得、即如來禪。維摩詰云、如自觀身実相、觀仏亦然。我觀如來。前際不來、後際不去、今則無住。以無住故、即如來禪。〔神會語録 p.131.2〕

⑬「和上言、有無双遺、中道亦亡者、是無念、無念即是一念、一念即是一切智、一切智者即是甚深般若波羅蜜、甚深般若波羅蜜即是如來禪。是故經云、善男子、何等觀如來乎、維摩詰云、如自觀身実相、觀仏亦然、然我觀如來、前際不來、後際不去、今既無住。以無住故、即如來禪。如來禪者、即第一義空。若菩薩摩訶薩如是思惟觀察、上下昇進、自覺聖智。〔神會語録 p.146〕

⑭「前節で見た」とく、「夫求解脱者、離身意識、五法三自性、八識二無我。離内外見、亦不於三界現身意、是為宴坐。〔神會語録 p.232〕

⑮「但し」菩薩禪即是動。不動不禪是無生禪。禪性無生。離生禪相。禪性無住。離住禪動。若知禪性無有動靜。即得無生。無生般若。亦不依住。心亦不動。以是智故。故得無生般若波羅蜜。〔T.9.368a〕と云うのは神會に近い表現である。

⑯「菩薩令彼衆生。存三守一入如來禪、以禪定故、心則無喘。大力菩薩言、何謂存三守一入如來禪。仏言、存三者、存三解脱、守一者守一心如。入如來禪者理觀心淨如、入如是心地、即入實際。〔T.9.370a〕

⑰「諸經觀法備有多種。傳大師所説。独拳守一不移。先修身審觀。以身為本。〔T.85.1288a〕

⑱「問曰。何知自心本來清淨。答曰。十地經云。衆生身中有金剛仏性。猶如日輪体明円満廣大無辺。只為五陰黒雲之所覆。如瓶内灯光不能照輝。譬如世間雲霧八方俱起天下陰闇。日豈爛。也何故無光。光元不壞。只為雲霧所覆。一切衆生清淨之心亦復如是。只為攀縁妄念煩惱諸見黒雲所覆。但能凝然守心。妄念不生。涅槃法自然顯現。故知自心本來清淨。〔T.48.377b〕

⑲「璿曰、此老比丘、為法忘身、心無貢高、又可貴也。乃告曰、篇聚者被身而已。我有心法曰如來禪。昔三歲菩提達摩自天竺來、付此法于慧可、僧璨、

道信、弘忍、神秀。七伝至我師普寂。」〔大日本仏教全書 101.p.190a〕

⑳〔楞伽人云、此経開權与法華義等。若爾、何故前後諸文皆斥二乘及以外道。故第三云、一切愚夫禪者謂二乘、此斥三藏也。一觀察禪、謂離自他、得人無我、亦離外道、豈非通教。三真如禪、謂知念不起、豈非別教。四如来禪、謂入仏地、豈非円教。故知彼教猶存權乘、以大斥小、亦与前明位義、意因。〕〔T.46.250b〕。なお、(楞伽経)は七卷本を用いてゐる。

㉑ [8ba] lam myi mthun ba'i sems can grangs myed pas / mam par rtog pa'i the tsom zad myi shes [1/2] te/ mdor na ci tsam du yid myi ches shing the tsom du 'gyur to chog/ ran gi rtog pas bslung shing / sngon de bzhin [2/3] gshegs pa'i bsam gtan la ma bsgoms pa'i mtha' yin bas / de kun myi bsam zhing [3/4] tshor ba bya 'o //

de bzhin gshegs pa'i bsam gtan cig car 'jug pa la / sems bskyed pa [4/5] tsuma gyis kyang khams su ma zil kyis gnon par 'gyur na / ma nor bar sgom pa lla smos kyang zi dgos te / dper [9a1] na seng 'ge'i phru gu myig ma bye ba yang / byol song gzhan skrag par byed pa dang / ka la bing ka'i phru gu sgo nga nam mka la lhags [1/2] nas / ma yang 'phur bu (=phru gu) yang 'phur ba dang mtshung te / bsam gtan 'di'i yon tan ni 'jig rten na / [2/3] dpe' bya ba sla ba ma yin pas na' / mthu dang don che'o //

bsam gtan 'di ni theg pa ched (= cheng) po'i chos la [3/4] dad cing / chos thams cad sems tsam du yid ches pa thams cad / su yang bsgom zhing brtsal du rung gngo // [S.709.8b1-9a4]

㉒ [43a1] bsam gtan gi yi ge // lha btsan po khri strong lde brtsan gi mgur gi phyang reya 'og nas 'byung ba' //

rnal 'byor [1/2] chen po la 'jug pa mams la dgongs pa'i don // de bzhin gshegs pas bsam gtan gyi sgo mo grangs myed pa [2/3] gsungs pa'i nang na // 'phags pa lang kar gshegs pa'i lung las // nyan thos dang mur 'dug la stsogs [2/3] pa'i bsam 'gan mtahan ma sbom po can dang / dad pa spyod pa dang/ sa la gnas pa'i byang cub sems dpai' [4/5] bsam gtan myigs pa yod pa dang // dmnyigs pa myed pa'i rim pa danga / de bzhin gshegs pa'i bsam gtan mtha' / [43b1] thams cad las 'das pa yod de // bsam gtan byed du 'dra ba las // 'jig rten dang 'jig rten las 'das pa dang // [1/2] 'jiga rten las 'das pa'i mchog mam pa 'di gsum gyi bye brag kyang mngon par 'byung ngo // de la bsam gtan gi nang na ni // de bzhin gshegs pa'i bsam gtan dge'o zhes gsuns pas na // da 'dir ni rnam grangs gzhan [3/4] gi gtan tshigs myi smos ky'i // de bzhin gshegs pa'i bsam gtan gyi lung rnal 'byor chen po pas las su bsgom ba nyi tse [4/5] mngo tsuma zhig bstan to // de bzhin gshegs pa'i [3/4] bsam gtan gi rjes su 'jug pa'i sras mams kyang // sems dang yid dang / yid ky'i rnam par shes pa la ma yin gyi // mchog gi ye shes

'phags [4/5] pa / so so rang gis rig pa'i bde ba la gnas pas / rgyu las myi sgrub / bras bur myi re mod kyi / de de nyid chos nyid kyi sangs rgyas su 'gyur ba'i las yin te / [45a1] de las nyan thos dang // mu steg can las stsogs pa'i sa gzhan du myi ltung go /// [S.709,43a1 -- 45a1]

⟨㉓⟩ [7b3] de bzhin gshegs pa'i bsam gtan ni mshan ma yod pa dang / [3/4] myed pa'i thabs la myi rtog par rtog pa thams cad zil gyi gnon pa 'phags pa rang gis rig pa'i ye shes gyi rjesu [8a1] 'gro bste gnas ngan pa'i bag chags dang / bral ba / sangs rgyas gyi byin kyiis briabs pa la 'jig rten gyi rtsi [1/2] shing skye ba dang rol mo rgyud sbyar blar rins kyiis ma yin gyi // mye long gi ngos gyi gzugs brnyan dang nyi ma'i [2/3] dkyil 'khor 'dzam bu gling du nga phyi myed par 'char ba ltar bag chags cig char sbyong ba yod do zhes // [3/4] ling kun las kyang gsungs pa yin te / byang chub sems dpas myi skye ba'i chos la bzod pa thob nas // bdag [8b1] du lta ba nas mchog gi ye shes gyi bar du thob pa yang myed ma thob pa yang myed pa'i phyi shes rab gyi pha rol du phyin [1/2] (phyi-in-) pa la gnas te spyod do // [S.710,7b3-8b2]

⟨㉔⟩ [12b3] ji ltar na de bzhin gshegs pa'i [3/4] bsam gtan ma nor ba yin zhe na // mal 'byor chen po la 'jig pa ni mchog gi ye shes gyi sems rjesu myi mthong / [13a1] chos gyi skus phung po rjes su myi mthong // sems dang pyung po las gzhan ba'i dngos po gud nas / [1/2] btsal ba yang rjes su myi mthong // mchog gi ye shes kyiis ye shes nyid kyang rjes su myi mthong // [2/3] chos gyi skus chos gyi sku nyid kyang rjes su myi mthong // ste / mtha' cad las 'das pa ni srid pa [3/4] gsum gyi chos dang myi gcig par rig par bya'o // [S.710,12b3-13a4]

⟨㉕⟩ [29,5] mam par shes pa thams cad ni mshan ma myed pa'i ting nge 'dzin du gyur // chos thams cad [30,1] bzhan nyid du mthong ba'i ye shes lhun gyis 'grub pa'i dus na' / ma rig pa dang / mam par shes pa myed pas / [1/2] shes rab kyo las kyiis kyang ji yang byar nyed de / mam pa myi rtog pa lhun gyis 'grub pa'i dus na / nan tan bya ba [2/3] myed kyang / ma rig pa dang shes rab myed par cig car lhun gyis 'grub bo // dper na rtsi shing yod kyi bar du na [3/4] mye 'ang 'bar gyi / rtsi shing zad na mye 'ang cig car zad pa bzhin no //
de ltar 'phags pa'i shes rab [4/5] de 'ang myed par gyur pa'i 'og du / gal te thams chad kyi thams chad du myed dam / yang de yang ma yin [31,1] bag zhan zhig yod dam zhe na btags pa'i sgo nas ma yin gyi / de ni 'phags pa rang gis rig pa'i yang dag [1/2] kyi ye shes don dam pa'i sgo nas te // yod pa dang mye pa'idon kyiis // lhag pa spros [2/3] pa' thams chad // ny'e bar zhi ba'i phyi'r na de bzhin gshegs pa'i bsam gtan ni [3/4] bsam gtan thams chad kyi nang na / dge'o // zhes 'byung ba' / [S.704,29-31]